

## 10月3日校長講話「手ぶくろを買いに」

今日は、校長先生の大好きな本、「手ぶくろをかいに」を読みます。このお話は、教科書にのっている「ごんぎつね」を書いた新美南吉さんのお話です。

<あらすじ>

寒い冬がきつねの親子が住んでいる森にもやってきました。初めて雪の降った朝、子どものきつねは雪の上で遊びました。遊んで洞穴に帰ってきた子ぎつねは、「お手々が冷たい。」とお母さんに、手を温めてもらいました。お母さんは、子ぎつねに町で毛糸の手袋を買ってやろうと思いました。

夜になり、手ぶくろを買いにでかけたお母さんは、町の灯をみたとき、お百姓に見つかり、怖い思いをしたことを思い出しました。どうしても足が進まなくなったおかあさんは、子ぎつねひとりで町へ行かせることにしたのです。

お母さんは子ぎつねの片方を人間の子どもの手にして、帽子屋に行ったら、この人間の手を出して手ぶくろを買うように教えました。人間はこわいものだから、決してきつねの手を出さないように言い聞かせました。

子ぎつねは帽子屋を見つけると、まちがえてきつねの手の方をだしてしまいました。帽子屋さんは、きつねが木の葉で買い物に来たと思いました。子ぎつねがお金を渡したので、手ぶくろを売ってあげました。子ぎつねは、人間はおそろしくないと思いました。人間の親子の様子を窓から見ると、人間のお母さんもやさしいと思いました。

お母さんが恋しくなってお母さんのところに帰った子ぎつねは、お母さんに人間はこわくないと話しました。お母さんは、本当に人間はいいものなのだろうか、とつぶやくのでした。



校長先生が、この本が大好きなのは、人間はおそろしいものと教えられていた子ぎつねが帽子屋さん、人間のお母さんと出会って、人間はおそろしくない、と思ったところに温かさを感じたからです。

みなさんは、どんなふうに感じましたか。図書館にも「手ぶくろを買いに」はありますので、読んでみてください。